

日露首脳会談で、二重の戦後処理に着手した安倍首相

プーチンは、 国境は動くと云ったのだ

作家 元外務省主任分析官
佐藤 優



明治大学特任教授、東大名誉教授
山内昌之

やまうちまさゆき

1947年北海道生まれ。カイロ大学客員助教授、ハーバード大学客員研究員、東京大学大学院教授などを経て現職。紫綬褒章、司馬遼太郎賞などを受ける。「スルタンガリエフの夢」(サントリー学芸賞)、「瀕死のリヴァイアサン」(毎日出版文化賞)「ラディカル・ヒストリー」(吉野作造賞)など著書多数。

さとうまさる

1960年東京都生まれ。英国の陸軍語学学校でロシア語を学び、在ロシア日本大使館に勤務を経て、作家に。同志社大学神学部客員教授。「国家の罫」「自壊する帝国」「私のマルクス」「新・帝国主義の時代」「ケンカの流儀」「新・地政学」(山内氏との共著)など著書多数。

共同記者会見のポイント

北方4島での共同経済活動の実施のための「特別な制度」について交渉を開始することで合意

両首脳とも、平和条約締結に向けた意欲を表明し、その一歩となる共同経済活動を評価

北方領土問題を含む平和条約締結交渉について、首相が「まだまだ困難な道は続く」との考えを表明

「島」が語られなかったワケ

山内 ロシアのプーチン大統領と安倍首相の会談を受けた直後の報道は、例によって「北方領土について進展が見られなかった」といったトーンのもが多かったですね。

佐藤 結論を言えば、今回の日露首脳会談により、両国は大きな成果を得たと私は思います。

山内 まったく同感です。元島民の自由往来の拡充や四島における共同経済活動についての交渉開始などを行うための「共同声明」にも、非常に大きな意味がありました。

佐藤 その共同経済活動が、「日露両国の平和条約問題に関する立場を害さない」という共通認識の下に進められる」とされたのは重要です。率直に言えば、「平和条約締結後に歯舞、色丹の二島を返還する」という

一九五六年の日ソ共同宣言に基づいて事態を動かそうというのが、今の安倍政権のスタンスですから、この文言は、日本側からすれば「二島にフックをかけたよ」ということを意味します。やっとフックが掛かって、引っ張れるかどうかこれからチャレンジしてみようということなのです。山内 「領土」「返還」「引き渡し」といった言葉が全く出てこない、だからまたもや北方領土問題が蚊帳の外に置かれた、と。こうした論評は、あまりに皮相的と言わざるをえません。むしろ、入らなかつた意味、あえて「入れなかつた」意図を正しく読み取ることが大事だと思ふのです。両首脳の発言を注意深く聞けば、そこにこの問題の解決に向けた積極的な意思が感じられますよ。佐藤 まさにその通りで、北方領土を巡るこれまでの交渉の際に耳にタ

コができるくらい聞かされた「四島の帰属に関する問題を解決して平和条約を締結し……」という、九三年の「東京宣言」の話は、安倍さんの口からも一言も出てこなかったでしょう。なぜ、いつも出てきていたものが、今回は出てこないのか？ これも外交の世界では意味のあることで、日本は事実上「東京宣言至上主義」からの離脱を宣言したのです。山内 別の観点から言えば、島の帰属問題について両国が正面から争うという古典的な手法では、解決する道は開けない。ひいては日露関係を前に進めることは不可能である。要するにもっと大きな戦略的な視点、思考の中にこの問題を組み入れていく必要性があることをプーチン大統領も安倍さんも理解して、今回その領域に歩みを進めたのではないか。佐藤 同感です。日露外交のステー

ジは上がったのです。単純に主張するのではなく、複雑系のゲームに入ってきた印象を受けます。

山内 学者や評論家ならいざ知らず、政治家、外交官は、実際に何がしかの成果を引き出す必要がありますから、レバレッジ(槌子)を具体的に使わなくてはならない。共同経済行動こそ日本からロシアに仕掛けたレバレッジなのです。北方領土問題に関して自ら命名した「新しいアプローチ」、すなわち過去の発想にとらわれない取り組みの具体化に、いよいよ本格的に乗り出す意欲を感じました。

元島民の手紙が プーチンを動かした

佐藤 今回の交渉の意義が捉えにくいのは、お互いに「愛してる」とは口にしないで思いを告白する「恋愛

んだ」と述べました。間違いなく本音を語っています。同時にプーチンは、こう深読みしたはずですよ。「はあ、ここには安倍総理のやりたいことが滲み出ているのだな」「わざわざこんな手紙を渡すような仕掛けをするのだから、今度は本気なのだな」と。

山内 「島を返せ」といったことは、書かれていないのが一種のレバレッジなのですよね。

佐藤 そういう手紙だったら、無視したでしょう。会見でプーチンは、先ほどの言葉に続けて「私たちは、あの島の歴史的なピンポンに終止符を打ったほうがいいと思う」と語りました。「歴史的ピンポン」というのは、役人が作れる言葉ではありません。元島民の訴えに感動し、その裏にある日本政府の真意をくみ取った政治家が自ら考え、発言したので

ゲーム”だからです。例えば、日本は三〇〇億円に上る経済協力を表明しました。これまでの北方領土関連の人道支援は一〇〇億円程度です。から、その規模が分かるうというも。ただあえて言えば、これは民間が主で、はつきり言って絵に描いた餅になる可能性がゼロではない。プーチンは、「領土問題で進展があれば、これが実現するんだね」と受け止めたはずですよ。

一方、プーチンは「信頼回復のためには、全面的な関係の構築が必要だ」と言っているわけであって、領土問題から逃げているわけではありません。そこに余計な不信は持たないほうがいいと思います。

山内 両首脳とも世論を背負っていますから。日本側には、会談を受けて自民党幹事長の二階俊博さんが「国民の大半はがっかりした」など

プーチン熱井の真意

山内 今佐藤さんが紹介したプーチンの言葉は、一〇分弱の長い発言の一部です。冒頭で北方領土の歴史に触れたこの大統領のスピーチは、なかなか迫力に充ちていました。

佐藤 「北方領土問題」の出発点を一九四五年のヤルタ協定にせず、一八五五年の日露和親条約にまで遡った。つまり「四島は日本のものだった」時点から語り起こしたプーチンの歴史認識には、大いに注目すべきだと思えます。

山内 プーチンはサンクトペテルブルク大学に学びましたが、かの地は東洋学・日本学の伝統があり、日本との交流の歴史などを知るのに格好の場所ですね。択捉島を探検して「大日本恵土呂府」という木柱を立

と発言する構造もあります。

佐藤 あれは二階さんが悪いのではなくて、交渉内容を自民党幹事長に説明していない外務省の怠慢です。

山内 ロシアにも、返還などまかりならんという岩盤のように硬い世論がありますからね。確かに、今の時点で「愛してる」とは言えない。

佐藤 私は、今回の交渉で安倍さんが手渡した最高のラブレターは、元島民がプーチンに宛てて書いた手紙だと思えます。

山内 NHKの報道によれば、「生存者の平均年齢が八十一歳を超えている」という現状を記したうえで、生きていくうちに故郷に戻りたい。島で朝を迎えたい。何時でも墓参りをしたい。自由に島に行きたいという願いがしたためられていた。

佐藤 プーチンは会見で、「南クリル諸島の元住民の心に残る手紙を読めた近藤重蔵や、間宮林蔵といった日露関係の初期、江戸幕末の堀織部正など日本人関係者についても、彼は正確に理解しているわけですよ。だから、その地にこだわる日本人の心情も理解している。

佐藤 プーチンはこう言いました。一八五五年に平和条約を締結するために、ロシアはクリル諸島を日本に引き渡した。ちょうど五〇年経って、日本はその島だけでは満足できないと思うようになり、一九〇五年の日露戦争の後に、戦争の結果としてサハリンの半分を取得した。四〇年後の四五五年の戦争の後に、ソ連はサハリンを取り戻しただけでなく、南クリル諸島も手に入れることができた。こうした歴史があるので、おっしゃるように国後島、択捉島に関しては、日本人が特別な思いを抱いているのを理解しています、と暗に

述べたんですね。

しかし一方で、日本は五一年のサンフランシスコ平和条約で、国後、択捉を一度放棄したでしょう。五六年の日ソ共同宣言の時には、「領土問題を含み平和条約交渉の継続」と言っていたにもかかわらず、詰めの段階で「領土問題を含む」という文言を削ることに合意したじゃないですか——とも言っているわけです。要するに、法的には少なくとも歯舞色丹以外を返還する責任は、我々にはないのだ、という原則論です。

山内 彼はまたスピーチの中で、「我々の船は太平洋に出たりする。そこで何が起きるのか理解しなければならぬ」「日本とアメリカの間に安保条約が存在しており、日本は決められた責務を負っています。この日米関係はどうなるのか、私たちには分かりません」と「懸念」も表

明しました。

要するに、ロシアの艦隊なり民間船舶が日本海やオホーツク海から太平洋の外洋に出ようとすると、国後と択捉の間の国後水道を通ることになる。もし二島でも返すと、そこには日本の主権が確立され施政権が敷かれる。日米安保条約5条の対象となり、引き渡した島は米軍が防衛義務を負い、極端な場合には米軍の施設ができるかもしれない——。この懸念を払拭してくれるのか、ということですね。ある意味、日本に対して宿題を出しているわけです。

佐藤 それに対する答えは、「安保条約の適用除外にはできません。なぜなら、仮に北朝鮮がこの地域に向けてミサイルを発射するといった事態になった時、それに対して米軍が手出しできないという状況はありえないからです。ただ、米軍基地を置

くといった話は、日米合同委員会の協議を経る必要があります。日本政府は責任を持って、そこに米軍は展開しないという合意を米国と取り付けます」ということでいいのではありませんか。

「戦後」と「冷戦後」の処理に乗り出した総理

山内 さきほど佐藤さんは、プーチンが日本人の心情も理解する歴史的な話をするとともに、法的な認識も提示しているという話をされました。それは、とりもなおさず「法律と歴史や心の問題とは別だ」というメッセージだと私は解釈するのです。法に照らした見解はそれとして、「心」によっても我々は動くのだ、と。

そういう重要なメッセージを引き出したのが元島民の手紙であり、それを手渡した安倍首相だった。今回

の「外交芸術」は、率直に評価すべきでしょう。

佐藤 恐らく安倍さんは、領土問題をはじめとする日露関係を前に進めることが「二重の戦後処理」であると、正確に認識しているのではないのでしょうか。「二重の」というのは、七〇年前の太平洋戦争と東西冷戦という意味です。

山内 なるほど、それは非常にうまい表現ですね。もしかするとご本人の中には、その二つを繋ぐはずであった外務大臣、未完成の宰相として志半ばで倒れた父・安倍晋太郎氏に対する思いが込められているのかもしれないですね。

佐藤 そう思います。安倍晋太郎外務大臣は、ソ連のゴルバチョフ書記長に対し、今の首相と同じく経済協力などに関する八項目の提案を行いました。今整理してみると、あれは

やはり二重の戦後処理だったのです。「戦後処理」では、戦勝国と敗戦国というパラダイムから抜け出せない。「冷戦後処理」の出来る時代になっても、様々な構造転換の必要なのが分かってきた。そのためには、「新しいアプローチ」が必要だということです。

ただ当時に比べると、「冷戦後」と呼べないほど世界は不安定化しました。中国の脅威が高まり、中東の混乱が拡大し、英国のEU離脱やトランプの登場といった「事件」も起こった。そうした中で、懸案の領土問題にかけたフックを引っ張りつつ、対露関係を強化していくことの歴史的な意味を、安倍さんはよく理解していると感ずるのです。

山内 それは戦略的思考ということでしょうね。

佐藤 考えてみれば、山口は自身の

選挙区であるだけではなく、父親の魂が宿っている場所ですからね。そこにプーチンを呼んで九〇分の会談を行ったことには、ある種の歴史の巡り合わせのようなものも感じます。

今、日露が接近する意味

山内 安倍政権の目指す日露の関係強化を、「対中国対策」と捉える見方も根強いですね。

佐藤 アジア太平洋地域の安全保障に関しては、日米中露の四カ国がプレーヤーです。それぞれの関係を見れば、日米は同盟関係にある、日中はいろいろ抱えているけれども、歴史的にも交流の幅は広い、米中はトランプになってにわかには緊張したけれど、これも交流の胃口自体は広い、中露は準同盟とまでいかななくても強固な関係を築いている、米露は対立しつつも安全保障措置はしっかり取

っています。そう考えると、日露関

係だけが非常に「貧弱」なんですよ。ですから日露が近づくことは、恐らく両国にとってWin-Winなので、ご指摘の対中国でも、一つの変数としてロシアカードが使えるということになるかもしれません。ただ、この地域の状況は、今の四カ国の総合的なバランスに規定されるわけで、ロシアと手を握って中国を絞めてやれ、という話にはなりません。

山内 御指摘の通りです。中国や北朝鮮が一方的に挑発を仕掛けている事実はあっても、日本はそれに対して同じ次元で直対応してはいないわけです。ロシアと新たな同盟関係に進むような思考法は、自分たちだけの論理、世界観によって安全が保障できるという、まさに中国と同じ道を選択することに他なりません。それは、逆に平和や秩序の破壊要因に

なるでしょう。

安全保障に関して言えば、では「ロシアにとって日露はどうなのだ」というところが非常に重要だと思うのです。ユーラシアという場を設定すると、NATO、EU、ウクライナ、クリミア、シリア、中央アジア、新疆と中国……みんなロシアにとって不安定要因以外の何ものでもないわけです。ところが、東に目を転じてみると、そこに極めて安定的な要因が存在することを当然プーチンは重視するわけです。潜在的に領土問題、平和条約締結問題を抱えながら、事実上の平和状態を築けるような、頼りになるパートナーがいたんですね。プーチンにとって、この日本との関係を壊すことは得策ではない。

佐藤 西も東も、不安定要因に囲まれてしまいますから。

山内 そうです。日本との関係を壊

ます。繰り返しますが、プーチンは会見スピーチで、北方領土の歴史を詳しく語りました。あれは、「日本人の心情も分かる」の他に、「今まで国境線はこんなに動いてきましたよね。今のだって動かせるのです。だから、我々は歴史の検証に耐えることをしようではありませんか」というメッセージだと思うのです。

山内 どのくらいで事態は動くでしょうかね。

佐藤 私は、そんなに時間はかからないのではないかと思うんですよ。一〜二年のうちには、道筋が見えてくるのではないでしょう。逆に言えば、ここで停滞すると固定された状態が長く続くことになるかもしれません。「愛情」を確認した直後の時期が、両者にとって大事なのです。**山内** 「世論」という不安定要因もありますからね。あの会談で両首脳

のどちらがリスクを背負ったかという、多くの日本人は安倍さんだと思っただけでしょうが、実はプーチンかもしれない。ナシヨナリズム、国家観といったものが、日本とはまるで異なる国ですから。

ともあれ、プーチンは「あの島の歴史的なピンポンに終止符を打ったほうがいいと思う」と明言した。これから始まるのは、ただ相手に球を打ち返すだけの不毛なラリーではなく、来た球の意味を考えてそれに対するメッセージを積み重ねていくような、「新しいピンポン」にしなくてはいいけません。

佐藤 同時に審判も二人いて、合議で判定を下していくゲームになるでしょう。法的には歯舞群島、色丹島の引き渡し以上の義務は負わないという「法定審判員」と、「一八五五年」に遡るマインドを持ち合わせた

すことなく、その強化を図る。プーチンは、ユーラシアを中心とした世界を俯瞰しつつ、そういう戦略的な思考に従って行動しているのです。

一方、首脳会談後の会見で「過去にとらわれることなく」「未来志向の発想が必要だ」と述べた安倍首相も、いろいろ批判にさらされつつも、戦略的な地球儀俯瞰外交を提起した政治家です。昨年末の会談は、そのことを改めて証明するものになったと思います。重要なのは、そうした安倍さんの戦略的思考に、プーチンが自分に共通したものを見出し、信頼を置いていることです。図らずも日露のリーダーに戦略性を持った長期政権が築かれているという「歴史の狡知」を生かさない手はありません。

「新たなピンポン外交」

佐藤 私は、国境は動くと思ってい

「歴史の審判員」です。

山内 いずれにせよ、ゼロサムゲームではありません。戦略的思考に則って、双方が譲歩し合うような交渉を重ねれば、道は開けるのではないのでしょうか。

佐藤 私は、両首脳がお互いに個人的良心ではなく、職業的良心に基づいて行動できるかどうかのポイントだと感じています。安倍さんに関して言えば、右派政治家としては「北方領土プラス千島列島二十二島と南樺太を返せ」と心の中では思っているのかもしれませんが。しかしここは、日ソ共同宣言をベースにした解決に、まずは全力を挙げてほしい。いろんな突き上げがあるかもしれませんが、それらには屈せず、国益に基づいたプレーを続けてもらいたいですね。